2019年3月7日　第98号

ひろの会だより

「死別の悲しみを分かち合う会」

３月の集い

日 時 ： ３月１６日（土）午後２時より

会 場 ： 東区総合福祉センター

４階　ボランティア研修室

会 費 ： ２００円

ダーウィンは家族思いの人で、子供たちの世話をよくしていました。子供の一人は「邪魔に感じるくらい子供全員を分け隔てなく溺愛した。家族に愛情を熱心に注ぐ父は、子供心に風変わりに映った」と回想しています。

子供が10人いましたが、そのうち２人は幼くして亡くなっています。かわいがっていた長女アニーが10歳で病死すると、ダーウィン夫妻は立ち直れない悲しみに打ちひしがれました。

もともと信仰心の薄かったダーウィンは、娘の死によって神の慈悲など存在しないことを確信したそうです。アニーの死は自然の気まぐれだと考えることで心の整理をつけたダーウィンは、自然界の気まぐれ（自然淘汰）を身をもって実感しました。

生物の死は神や罪とは何の関係もない、自然の過程の一つにすぎないというダーウィンの信念は、アニーの死によって「最後の一押し」を受けました。

進化論にはアニーの死が色濃く反映されているそうです。娘の死を進化論という形で昇華させたのかもしれません。

ひろの会は、大切な方をなくした人が自分の思いや体験を語り合い、悲しみを分かち合う場です。大切な方の死は深い悲しみと苦痛をもたらします。ひろの会はそうしたメンバーの心の傷の回復を共に歩みます。

ひろの会では、どんな話をしてもいいし、話したくなければ他の方の話を聞くだけでもかまいません。話したくない人に話をするよう強制はしません。

ひろの会は特定の宗教や営利事業とは無関係です。

過去を振り返り、今思うこと（４）

五百井正浩さん

うちの寺では、震災で亡くなられた何人かのお骨を預かっています。小学校５年生の男の子のお骨もあって、もう１０年近くたつ今でも、当時の同級生と担任の先生が毎月来られるんですよ。

でも、お母さんは全然来られないんですね。「なんでやろなあ」といつも不思議に思ってたんです。こないだ聞いてみました、「なんで来られへんのですか」いうて。「友達もこないに毎月来てるんですよ」と言うたんです。

そしたら、「私の子供は小学校５年のままや。あの子らもう２１歳なんや。大人や。それ見るのがつらいから、よう行かんのや」と。そして「それを主人に言うたら、いつまでそんなことを言うてるのやと怒られるんや」と。「どうしようもない」と。

こういう場合、どうしたらえんかなあと考えたんですけど、私は結論としては各地区ごとに近親者を亡くした人の会があればよかったんじゃないかと思うんです。

あしなが育英会の人たちはそういう仕事に携わっていました。交通遺児とか自殺で親を亡くした人たちが、被災した孤児の家を尋ねて話し相手になったり、お互い支え合ってしゃべれるレインボーハウスという場所を作ったんです。精神的につらい思いをしている人を理解してケアしていく動きでした。

また、尼崎市に英知大学というキリスト教系の大学があるんですが、そこのシスターの方は、震災でお子さんを亡くしたお母さん方を地域ごとに集めて、専門のお医者さんなりカウンセラーなりを配置して、悲しみを共有するという、そういうことをやられたんです。

ただそれは、阪神地区に一ヵ所じゃ意味がないんですね。各地区ごとに設ける。イヤな人がおるとかだったら、他の場所に行ってもいいという、そういう形のものがあったらよかったんですけどね。

それは部分的にはあったけど、全体的にはなかったなあと。心のケアという言葉がかえってあやふやにしたという面があるわけです。

その時によく言われたのが、トラウマという言葉とストレス障害ということです。トラウマというのはお医者さんの定義からしたら、自分が死ぬとか、殺されるという中で、それに対して無力な位置に立たされた時に起こった精神障害という規定があるんです。だから家が壊れたからとか、すごく揺れて恐かったというのはトラウマとは違うんだそうです。

人間、つらい、思い出したくない体験をして、そこから逃げよう、忘れたいと思っても、思い出してしまう状態はストレス障害というんだそうです。

トラウマとストレス障害とは治療法が全然違うのに、それが当時はごっちゃになっていたんです。それはもう、はっきり素人が手出しできる問題やないから、困ったと思ったら専門医に診せるしかないんです。

それなのに、心のケアボランティアと称する素人が入って、いろんなことがあったんですよ。たとえば、ある人が「亡くなった子供はどこにいるんですか」と質問したのに、「あんた、亡くなったらどこへ行くつもりや」と逆に聞かれたんですね。

普段の時なら、自分が考えんことを人

に尋ねるのは横着やけど、考えることもできない状態にいる人がそういう答え方をされたら、ものすごくパニックになるんですね。かえって傷ついてしまう。それに対するサポートが全然なかったなと。

それとか、勤めている会社がつぶれたとか、そういう二重三重の問題がごっちゃになってる人もいました。なぜごっちゃになったのか、なぜ対応できんかったのか、そんな問題もありました。

（つづく）

講演会のアンケート結果（３）

・生きるには希望が必要だと思います。いろんなテーマで開いて欲しいです。

・個人的な悲しみのディテールは胸に迫りましたが、それをいかに昇華されてきたのかがお伺いしたかったです。

〝死生観の構築〟まさに『生と死を考える』テーマ　アルフォンス・デーケン先生……お元気ならばですが

ここの悲しみを吐き出せる場……それだけで十分存在意義もあるのでしょうけど……。いつも何か物足りなさを覚えています。

・医者の想い（死生観）、養生訓等、情報（癌治療等）

・もう１度、佐野さんのお話がききたいです。

・娘さんの名前を書かれたすてきな着物を着ておられたのに感動しました。悲しみの深さがよくわかった。生きているものが幸せでないと死んだ人を幸せに思えないの言葉ははじめて聞いた気がします。私も前向きに幸せになるよう努力したいものです。

林さんはお忙しいと思いますが、いつかじっくりとお話がききたいです。佐野さんの様なお話を聞きたい。

いつも有難うございました。音楽も優しさに身にしみています。

静子の酒場放浪記「孤独を漁る者」

死ぬまで泣き暮らすと思っていたのに人生今や１００年時代。あと何十年も泣いてなんかいられない。一人引きこもっていても誰も助けてはくれない。愛する者も戻ってこない。自分で扉を開けて外に出るしかない。と、今日も扉を開けてママの店に飲みに行く静子であった。

この日は体格のいい女性が一人、カラオケで歌っていた。まるで孤独をまとったかのような彼女は歌の最初から最後まで泣き続けている。さては訳アリ女に違いない…と思っていたら、察したママが

教えてくれた。
「もう１０年この調子よ。恋人が事故で亡くなってからずっと泣いてる。１０年前と全く変わらない」
　憔悴しきった彼女を見ていると、何か辛いことがあったのではと思っていたがつい最近の出来事なのだろうと。まさか１０年とは。すでに涙の出なくなった自分が薄情に思えてくる。ママのことだからこの１０年、話を聴き、時には共に泣き、寄り添い続けてきたのだろう。もう万策尽きたという感じだ。
「この人はねえ、孤独をすなどる人なのよ」
「すなどる？」
「漁師の漁ですなどる。漁師って魚を追うでしょ。この人はひたすら孤独を漁ってるの。それが人生の一部になってる」
　彼女は新たな扉を開いては孤独を漁り続けているのだろうか。店を後にする時も彼女は泣きながら歌っていた。出るとすぐに、友達が戸惑い気味に話しかけてくる。
「気が付かなかったかもしれないけど、あの人、男だよ。店じゃ有名だから」
「えーー！　全然気が付かなかった！どうりで体格がよかったのね。じゃあ恋人って女性？　いや男性か！？」
　これだから夜の酒場はやめられない。続く…

室生犀星は１歳の時に亡くなった息子のことを何篇か詩に書いています。いくつかご紹介します。

　溜息
わが家には子守唄はたと止みつつ
ひとびと物言はず
ものうげにうごくことなく
ただ溜息のみつき
きのふもけふも暮れけり。
われの飯いひを食みつつ
ふとものの声音に耳そば立て
しばしば顔をあはせ悲しみけり。
あか児の生きてありせば
涼しきレースのころも着せんものをと
かへらぬことのみ言ひ暮らしぬ。

事務局だより

〇ひろの会のホームページで「ＨＩＲＯ」などの手記・文集を読むことができます。「ひろの会」「手記」で検索してください。
この画面です。

〇少人数の分かち合いを２日に行いました。４月以降は未定です。これからも行なうかどうか、ご意見をお聞かせ下さい。

発行　ひろの会事務局（谷川）
広島市中区東白島町１６－１８
☎　（０８２）２２１―５２８５
Fax（０８２）２２１－５２８７
E-mail:enkoji@mx4.tiki.ne.jp